

出典;ネパールにおける「Sewa の場」と老人ホームの位置

中村 律子

※Sewa は、ひとの生・老・病・死に至るプロセスにおける世話（扶養や介護）、配慮、儀礼などの私的な行為から相互扶助的で社会的かつ宗教的なかわりを意味する概念。

揺らぐ高齢者への Sewa 観-伝統的家族主義か自立志向か

つい 30 年前までは、30 人から 40 人の二世帯、四世帯の大家族の中で暮らし、さまざまな役割が期待され、長年培ってきた経験や知識を持つ高齢者は、家族からも社会からも尊敬される立場にあった。特に農村地域に暮らす大多数の高齢者の場合は然りである。

しかし、近代化、民主化は、若者が農村を離れ都市へ移住するにつれ、大家族は崩壊し高齢者が農村地域に取り残される。都市部では核家族化が進み、家族全員が仕事に行くか学校に行くなかで日中を 1 人で過ごす高齢者も増えている。さらには、これまでは家族内で寝たきりや認知症になった高齢者の世話が行われていたが、病院に入院させて引き取ろうとしない、寺院、老人ホーム、火葬場の傍に遺棄する、財産は取り上げられ扶養することを拒否されるなどの虐待を受ける、教育や仕事のため海外で暮らす子どもたちが親の世話を老人ホームに任せる家族の出現など、高齢者を取り巻く状況、高齢者の生活基盤が大きく変わってきているのである。

老人ホームの実態

かつて、老人ホームは、家族やコミュニティから Sewa を拒否された高齢者が遺棄される場所として同情と哀れみの施設としてネガティブに認識されていた。今でも、「そっと、老人ホームの玄関に老親を置いていくのですよ」「このような人を保護したのですが、私は面倒見られないので、預かってくれませんかと言って高齢者を連れてきた人が、後で入居した高齢者から、実はその高齢者の子どもだったということもありますよ」と老人ホーム関係者は語る。

その一方で、都市部を中心に、多様な主体により運営されている老人ホームの出現が「伝統的な家族観が強固にあるため、老人ホームに老親を入居させるのに抵抗感がないわけではないが、ここ 4,5 年で、ネパール社会の中でも老人ホームに対するネガティブな考え方に変化が生じてきました」とも強調している。

ネパール全体の正確な老人ホーム実数は不明である。「ネパール高齢者実態報告書（2010）」によれば、政府に登録されているのは約 70 カ所、設立運営主体は政府系が 1 カ所以外は、個人、NGO、ボランティア、民間団体と多様な主体となっているとの報告がなされている。このように、正確な実数の把握がなされていないのは、登録することによって補助金を受けることができるため不正受給した老人ホームの廃止が行われたものの、その後の運営の実態の把握がなされていないことが一因である。

入居理由と老人ホームでの生活への思い

高齢者の中には、数奇な運命をたどり、最期を迎えている人が少なくない。息子がなく、娘だけがいて、娘も嫁ぎ先の家庭の世話のために実家の母親の世話ができなくなったため娘から老人ホームに入れられた。9 歳の時に 26 歳の男性と結婚したが子どもがいなかったため離婚させられ、夫は再婚し 1 人では生活ができなくて入居することになった。息子の家族が海外で仕事をする事になり自分で入居を希望した。インドで 40 年間仕事をして家族に仕送りをしていたが高齢のため仕事ができなくなり、帰国後は妻も死亡し子どもとも離散した。土木作業労働を続け家庭を持つことができずに独身生活を送ってきたなど、多様な境遇の高齢者がいる。

厳しい生活状況を送っていた高齢者にとっては、衣食住が確保され、宗教的な行事(ヨガや瞑想、お経を読む、宗教講和(ヴァジャン))で心静かな生活を送ることができる。嫁いだ娘やその夫が面会に来るケース、宗教関係の儀礼のための外出、家族・親戚や友人宅への外泊ができるという環境にも満足度が高い。また、手助けが必要な高齢者には、同室者だけでなく仲の良い入居者同士で助け合っている。常時、職員とボランティアが

入居者とともに掃除、洗濯、話し相手などの Sewa が繰り広げられている。様々な出身地域、複数の民族、異なるカーストのひとびとが、時には諍いをしながらも、他者の生や苦悩をケアし配慮するいわば「コミュニティ」での共生関係がつけられている。

「Sewa の場」としての老人ホーム

現在のネパールの老人ホームの特徴は以下のように整理できるだろう。

第1は、西欧型の考え方やシステムから考えれば、発展途上型の「前近代的老人ホーム」ということになるだろう。バリアフリーではない建物設備、大部屋(多いところで70~80名、少なくとも4人部屋、個室や2人部屋はまれ)、高齢者の心身の特性に対応する専門的ケア内容の不十分さや、資格もしくはトレーニングを受けたケア専門家の不在、職員不足など。しかも、ボランティアや「住み込み職員」のため無給の職員の存在。しかし、「困難を抱える高齢者への Sewa は私たちの社会的奉仕」であるとの強い信念やプライド、使命感が職員の仕事を支えている。(注; ネパールでは広く、sewa という概念のほかに、それに近い概念として paropakar が使われる。ともに仏教徒、ヒンドゥ教徒にかかわらず使用しており、サンスクリット的な文化を背景にもつ言葉である。sewa は親族やコミュニティなどの相互扶助的な実践、paropakar はより広い社会(自分が身を置くことになった現世)への奉仕の実践で、ともにこの実践を通して来世での幸せが約束されているというような人の行動規範というように理解している。ネパールにおける福祉施策を考察するためには、この二つの(実践の)用語は重要なキー概念となる。)

第2は、自立した高齢者が多いことである。建物設備や職員不足から高齢者自身が自立せざる得ない状況であるのも事実である。自分のベッドメイキング、配膳、食器洗い、洗濯、掃除などが出来る人は、自分が出来る範囲で職員やボランティアとともにやっている。同室者が寝たきりになれば世話をし、夜間勤務の職員がいない夜間のトイレ介助を行う高齢者も少なくない。「職員がいないから仕方がないね」「元気だから当然だよ」、「世話をするのはあたり前のこと」と職員とともに物理的不備を日常生活の中で工夫するという自立した生活を創っている。

第3は、身体と魂の「再生」の場としての老人ホームである。病気や寝たきりになり家族や親族の Sewa を拒否され「老人ホームに遺棄された」高齢者が、衣食住ばかりでなく瞑想や宗教講話(ヴァジャン)をとおした祈りと力によって「苦しかった暮らしから今はここで幸せに暮らせるようになった」「寺院にお参りにいくことで健康になった」「孤独だったが友人ができ、毎日が穏やかだ」と、自分自身の精神的な苦悩や身体的な苦痛を個人レベルでも癒しているように思える。救われた命と生の「再生」の場となっているともいえる。多くの老人ホームが、ヒンズー教や仏教の寺院、塔、聖なるバクマティ川沿いに建てられることが、さらに、高齢者の生(死に至る)の力を再生させてもいる。職員や他的高齢者とともに過ごし生きる老人ホームが新たな「コミュニティ」になっているのではないだろうか。

第4は、「Sewa」の社会性・共同性が展開されていることである。「この世で良いことをすれば来世は良いことがある」というブッダの教えや「ネパール社会では、世話をしたいという人が多くいて、彼/彼女たちは、信頼できる善い場所においてそれを行いたいと考え、そのような場を望んでいる。自分たちがより良く運営することによって、その多くの善意を持った人が集まり、それがさらに善となっていく」といった考えをEの責任者は語る。国内外問わず、コミュニティ、家族から老人ホームに寄附が寄せられる。その寄附は、金銭から米、豆、果物、飲物、菓子、衣類、電気機器類、寝具、生花など様々である。儀礼やお祭り(ティハール、ダサイン、母の日、父の日)の時は、日本語でいう「お裾分け」が頻繁におこなわれている。それに対して、老人ホームでは、老人ホームの高齢者を対象にした無料の健康診断を地域の高齢者にも開放している。このような相互行為は、施し、慈善、恩恵などの宗教的規範を超え、その社会性や共同性をみることができる。

ネパールでは老人ホームに住まう高齢者とともに生きる職員からは、規則、規範、システムといった考え方でその価値や仕組みを概念化したり考えたりすることが難しい、いや、するべきではないともあらためて示唆される。